

## ホイットマンの思想

## 清水春雄

## I 「草の葉」の意図

ホイットマンは引例されること多くして理解されること少なき詩人であると言われている。「草の葉」は摘む人々の心まかせに自由に利用されている。戦争礼讃者にも平和謳歌者にも等しく恰好の句を授ける。社会主義者、共産主義者、はては無政府主義者にも程よく担ぎ上げられ、革命家達は己が陣営の指導的同志として彼を仰ぐ。象徴派印象派の詩人らはわが派の創始者と崇め、自由詩の発達は彼に負うと讃える。一般には民主主義の詩人として通っているが、批評家の説はモダン・キリスト、キヤムデンの聖者から性的倒錯者、仮面演出家、パテン師に至るまで多彩を極め、而も時代によつて評価の浮沈も激しい。ホイットマンはそのように変容転貌カメレオンの如く無節操であつたのであろうか。

無韻無律の自由詩形、カタログ・スタイルと呼ばれる気紛れな語の羅列、繰返し、夥しい分詞構文、散文とまがう長句などたしかに奇異の感を与える。併し彼は詩に装飾は無用であるとして用語は平易を旨とし、意味のわたりを避けて行留めに意を用いている。彼自身の散文に於けるが如き晦渋さが無い。従つて一見平易に親しみ易く見える。それにも拘らず種々に受取られるのは何故であらうか。それは全体性を見極めず部分的に解釈を施しているが為であつて、罪はホイットマンの多面性にあると言えるかもしれない。

更に彼を難解ならしめている一つの理由がある。それは「草の葉」が単純な一冊の本ではないということである。周知の通り存命中に九版に及んだその殆

1. Preface, 1855.

2. 版の現れ方が複雑のためその算え方も区々である。例えば Henry Seidel Canby: *Walt Whitman an American*, p. 67 によれば12版。

どが改訂を加えられており、臨終版に於ける約 400 の詩篇の配列も必しも年代順ではない。そこに思想の推移、それに伴う心象の変化に矛盾の感ぜられる理由がある。この本来の多面性と時間的变化とを通じて彼の個性を保つ不変の思想は何か。その根本觀念はどうかを見るのが本稿の趣旨である。彼が生涯にわたつて詩人として宗教的民主主義を叫びつづけた根本動機は何であろうか。「草の葉」の計畫は彼自らの言葉によれば<sup>3</sup>28才から35才迄にまとめたという。併し何を感じ何を心に誓つたことか。それまでの職業——記者生活、教師、大工等——雑多な仕事の間<sup>3</sup>に於て特に秀でた人物とも見なされなかつたものが、忽然として「草の葉」の偉大さに達したその動機は何であつたか。「回顧録」<sup>4</sup>によると31才から33才になる時に私は独自の欲求と確信に取憑かれていることに気付いたとあり、正確に云へばそれ以前からその欲求があつたようだと述べているので先の28才からという句も正しいと見られる。そして今や彼の心に支配的となつたその欲求を次の如く語る。『これは僕自身の肉体的感情的道徳的知的美的個性を、その直接に接する時代と現代アメリカの重要な精神と諸事実の真只中に於て、而もこれらと一致せしめて、文学的又は詩的形式に明白に忠実に且非妥協的に表現し、かくして時と所に一致せるその個性を、過去の如何なる詩や書物よりも遙かに正しく且つ包括的な意味に於て開拓しようとする感情であり野心であつた。』この言葉から彼の野心の動機は彼が表現せんとする現在の時と所に対する異常な関心であるということが察せられる。そこで彼が呼吸していた時と所は如何であつたか。彼はそれらを如何に感じていたかを見よう。

初版の序文について見るに、先づ彼はアメリカの雄大さを意識する。人間の行動が日月の運行に類する規模の大きい民族が、この新大陸に誕生することを意識する。粗剛なしかし豊かな自然、逞ましい開拓の意欲、封建のきづなを断つた自由平等の普通人の大群、科学の発達による産業の急激な興隆——そうし

3. Preface, 1872.

4. *A Backward Glance O'er Travel'd Roads*, (1888).

た膨脹発展の国土と時代の迫力をひしひしと身に感ずる。と同時に彼は土地や物量の宏大さに精神の博大さが伴わぬ限りそれは怪物に過ぎないと気づく。そこから『合衆国の諸州は本質的に偉大なる詩である、』と讃えると共に『一国が詩人の要に迫られること今日のアメリカに於けるが如く急なるはない、』と叫ぶ。そしてアメリカの詩人たるものはその民族構成の示す如く、古今東西の諸要素を合せもちつつ而も現代アメリカの精神に照応し、その広大にして粗笨なる地理と同延なる宇宙的規模の詩人でなければならない。古い詩題は戦争とか恋愛とか傑出せる人物や異常な事件のみを取扱つた。他の諸国は限られた少数者によつて代表されるが、わがアメリカの特性を代表するものは普通の民衆であつて、一般平等の人々の生活こそ無韻の詩である。新しい詩は平凡卑小なるものにも意義を見出す。否大詩人は卑小なるものを知らない。高きも低きも善も悪も一視同仁、肉体も靈魂と共に尊ぶべく、頭脳や容色の優れたるもののみが崇めらるべきではなく、胴体も四肢も尊ばれなければならぬと万物を等しく讃える。それは凡てに靈性の存在を認めるからであつて、殊に人間にあつては学校であれ教会であれ、書物であれ個人の靈性を軽視する封建的な要素は一切これを棄てよと説く。

このような靈性に目覚まされた個人の有機的な綜合統一体としての共和政体こそ彼の描く未来の画であつて、ここに *The Great Psalm of the Republic* と自ら標榜する所以がある。

初版当時に於けるホイットマンの抱負は上述の如くであるが、更に晩年の「回顧録」の言葉を聴こう。『わが書と私——われわれは何という時期を経て来たことか。1850年から80年に至るかの30年——そしてアメリカがその中にある！ その激刺たる息吹を少しでも未来へ美事に送りこむために、若しわれわれがその時期の真精神を十分に汲みとることが出来たとしたならば、実に誇りに誇つてもよいことであろう。』この述懐は初版の意図がそのままに承けつがれて成長したことを示す。「草の葉」も後期のもの程その計畫が明かに記されている。*L. of G.'s Purport*, (1891) と題した詩もある。併し初期の間は表現も自ら言う通り *indirect* で *suggestive* であつてその意を簡単に捉え難

い。「草の葉」が模糊たるものから次第に明確な姿になつた過程は、アメリカなる国家の成立過程に等しい<sup>5</sup>と言う。即ちアメリカが雜然たるものから体制の整つた国家に進んだ状態を、星雲が凝集して燦然たる光芒を放つ天体に譬えているが、彼自身の歌はこのアメリカを表すものであるが故に、その内容も形式もアメリカそのものと体を同じくしているというのである。

決定版によると銘詩群の次に自伝的な *Starting from Paumanok* があつて、そこには宗教を創めるとか宗教的民主主義を説くとか言つており、また '72年の序文でも宗教的目的が最初から変化がなかつたと語つているので、「宗教」と「民主主義」は初めからの謳い文句であるが見えるが、実際は一、二版を通じこの両語は文字としては殆んど用いられていない<sup>6</sup>。*Starting from Paumanok* は第三版からの登場である。第三版から急に宗教が正面切つて唱えられるようになった経緯については、この版 ('60年) の出る直前に、彼の精神的危機が存在したと想像されている。そのことの正体は未だに伝記作家を悩ましていたのであるが、恐らく死を決意したに違いない恋愛事件<sup>7</sup>があつて死と愛の問題についての堀り下げがあつたであろうと言われている。また一因としてその期間に彼が独乙理想主義哲学の書籍に接し、自己の信念を固めた為であろうとも考えられている。

● 宗教という語を如何なる意味に用いているかを見るに、彼は元来言葉の定義は不用なり<sup>8</sup>と称しているのであるが、宗教は殊に定義困難なるものと認めているようである。彼の宗教という語の使い方を見れば、凡そ一般的に教会や僧侶に関連するものとは異つている。'72年の序文で彼は「草の葉」の目的は人間性と宗教とにあり、宗教は人間生活の生命であること化学と熱の關係の如しと言つている。そして宗教はカトリックでもプロテスタントでもなく、本来教会に

5. Preface, 1876.

6. 一、二版を通じ democracy は *Song of Myself*, §24 にあるものが只一語現れただけで其他は戦後の加筆。初版の序文にも出ない。religion は各種族各宗教等の句の中に用いられたに過ぎぬ。

7. Cay Wilson Allen: *Walt Whitman Handbook*, p. 68.

8. *A Backward Glance*.

委ねらるべきものではなく、民主主義と文学に任さるべきものであるとする。彼は初版に於て早くも個人の霊の尊厳を説いて、教会や書物に囚われず戸外に於てこの「葉」を読めと勧めているが、この「葉」が彼の所謂宗教の教本である。彼が宗教を創めるとするのは、この「葉」の教説を垂れることであるが、「葉」は端的に言えば魂の解放と救済の書である。彼の民主主義も新詩の説も結局これに帰する。新しい宗教とは人生と自然とについての彼独自の橋架けであり道造りであるが、彼は道を示すだけであつて、道は自ら歩むべしとの態度をとつている。靈氣に接し得るはただ孤独な「自我」によるのみと<sup>10</sup>言う。靈魂に於て一切が等し並に見られるという考えは「草の葉」全般の基調をなしており、その意味に於て全巻にわたり宗教的目的にvarietyなしという彼の言葉は正しい。

ホイットマンは南北戦争がなかつたならば「草の葉」も存在しなかつたであろうと述べている場合があるが、それはもとより言い過ぎである。彼の優れた作品の多い一、二、三版までは戦前の作である。戦後南北の融和を焦眉の急と感じ、戦争に向けられた眼を転じて建設に向けさせんとした。そして州と国家の関係を個と全の関係、實在論的な多と一の関係に於て見ようと試み、<sup>12</sup>今までは民主的個人を主としたが、これからは民主的国民性を歌う、アメリカの統合のためにこの歌をのこす<sup>14</sup>と言明している。従つて戦争が「草の葉」の意図に重大な転機を与えたことは間違いない。併しそれは最初の意図の拡大強化であつて方向転換ではない。更に晩年には産業の異常な発達に逆行する道義の頹廢を救わんとして道義国家の建設を叫ぶ。彼は自由を強調するが、普遍の法則と個人の意志の一致する所に自由の本義を見出そうと努力している。<sup>15</sup> こういう国家そのものに起きた事象の変化につれて、最初の「草の葉」の計畫に幾分の改訂

9. *Song of Myself*, § 46.

10. *Democratic Vistas*.

11. *A Backward Glance*.

12. "Freedom," *Notes Left Over*.

13. Preface, 1872.

14. Preface, 1876.

15. "Freedom," *Notes Left Over*.

があつたとしてもそれは已むを得ない。否19世紀後半のアメリカに於ける自己を写すという彼の意図は、忠実に果されているのである。

彼の最初の考えが30余年の風雪を凌いで約400の詩篇に成長した。その宗教的民主主義の思想は幾多の哲理教説を盛つて、築き上げられた一大伽藍にも譬えられる。併しその根柢にある汎神論的神祕説の故に、兎もすれば読者は彼の真意を把握し損じ、群盲象を撫ずる部分的解釈に甘んずる。

ホイットマンは、アメリカなる国家が一つの実験であるように、自分の詩も<sup>16</sup>実験であつて完成品と考えていないと述懐をもらしており、どこか曖昧な点のあることにも、また詩形の特異なことにも弁解的な言葉が見える。「草の葉」を余りに学問的に見る勿れと言ひ、また審美的には劣ることを認めて文学的にのみ解さるべきでないと言ふ。彼は民主主義の道づけに忙がしかつたので家屋の建造は後の世の人に委ねてある。強く優しい歌は後の詩人によつて歌われると将来に期待をかけている。そして自分の役割は出撃である、凱歌を奏するか否かは百年の後でなければ答えられぬと述べている。

彼の所謂宗教的民主主義に世界全土が結ばれるのは、彼が比較的気弱な時に述べた通り、古くして常に新しき地上の夢であるか<sup>17</sup>もしれない。百年後への期待は絶えず繰り返されることであろう。併し夢なくしては人類の向上も進歩もあり得ない。人類の可能性を想わしめる「草の葉」の意義は永遠であり重大である。

## II 「草の葉」の成長

「回顧録」によると「草の葉」成長の約30年を七、八期の苦闘の段階からなると述べているが、その思想の推移を辿るには次の如く三期に大別するのが便利である。

第一期 壮年期 (36才—41才), 南北戦争前 (1855—'60),

「草の葉」初版—第3版。

16. *A Backward Glance.*

17. *Democratic Vistas.*

第二期 中年期 (42才—53才), 南北戦争以後 (1861—72),

「草の葉」第4版—第5版。

第三期 老年期 (54才—73才), 発病以後 (1873—92),

「草の葉」第6版—第9版。

第一期は初版、第2版の意気盛んなる時と、第3版の哀感が生じた時とに分けることが出来る。第二期も戦争初期の謂わば太鼓をたたいている極く短い時、死の客観視の深まる時、更に戦後南北の融和を急務と考えている時、産業主義に蝕ばまれてゆく社会を憂い道義国家の建設を叫ぶ時と区分が出来る。第三期も重病のため意気とみに衰えた時、併し宗教的哲学的に一段と深みを増した時などが考えられる。こう細分すればホイットマン自身の段階に近くなるわけである。

彼の本来の希いは既述の通り宗教的民主主義の鼓吹にあるが、彼のその民主主義の思想を構成する根本観念は、汎神論的神秘主義、靈魂不滅観、宇宙進化の理念等を基礎としており、その上に独自の自由平等論、普通人尊重論、友愛論、肉体礼讃論、完全国家論等を展開している。基本観念については次項に於て述べるが、本項では期を追つて現れた作品各二三をとりあげ、その思想の推移の大要を辿つて見ようと思う。

第一期。初版は引受人のないままに友人の印刷所を借り自ら植字し装幀して出版したもので、或はその奇を意識していた為か彼は表紙にも背にも扉にも著者名を表さず、版權所有者のところに **Walter Whitman** と実名を附しただけである。上に述べた詩作の意図のもとに人間と詩の解放を目指す彼の使命を長々と序文に掲げ、無題の詩12篇を収めた。その巻頭の、そして最大の詩が後に数度の変遷を経て *Song of Myself* 「自己の歌」という標題に落付いたものである。それは全「草の葉」の序詩とも見らるべきものである。後に現在の「銘詩」が巻頭にのせられ全詩のプログラムの役割を果すようになったが、それらに纏められている根本思想は、順序の乱れはあるが「自己の歌」に既に表れているのである。

「自己の歌」の主なるテーマは自己、自然、靈魂、肉体、死生、愛、平等、男

女、性、善悪、科学等多岐にわたり、上記独自の諸論につき生涯に及ぶ大作の礎石が置かれている。初版にはこの歌以外にもその後の詩篇の解釈に有力な手掛を与えるものが多い。*The Sleepers* や *There was a Child Went Forth* には自己と自己の魂とか、目に触れる凡てのものになりきれぬ自己などによつて自己の二重性が強く画かれている。*I Sing the Body Electic* では肉体の礼讃と生理的な性愛の根元が説かれ、これが後に *Children of Adam* 詩群の核心をなすに至つた。「草の葉」の出現はその奇矯とも見える思想、乱雑な散文まがいの詩形、卑近な題材、強烈な性的イメヂヤリ、等のために酷評を受けた。併しエマソンは『偉大なる生涯の首途に当り貴君に敬意を表する。貴著はアメリカが生んだ最大の叡智の作品。私はこの太陽の光が幻覚ではあるまいかと一寸眼を擦つてみた。』<sup>1</sup> と激賞した。その上、カーライルへ『怪物的ではあるが正しくアメリカ的のもの』<sup>2</sup> として一冊贈つた。ホイットマンがエマソンの手紙をうけて如何に感激したかは、その文中の *I greet you at the beginning of a great career.* という句を無断で第2版の背にのせたことから解る。意外の不評に些か出鼻をくじかれた彼も、この手紙が挺入れとなつて第2版への意気を振いたたしめられたであろう。第2版では新旧とりまぜ32篇の詩がのせられた。初版の序文の内容が *By Blue Ontario's Shore* (最初 *Poem of Many in One* という標題であつたが6度変化している) となり、偉大な国家には偉大な個人が必要であると叫ばれている。*Song of the Open Road* では最善へとつづく靈的な宇宙の大道が説かれた。道徳的ヘロイズムのシムボル *Song of the Broad-Axe* もこの時の発表である。これらのように力強い作品が多いのであるが、この版の最も重要なものは *Salut au Monde* であろう。彼の哲学的神祕主義、各個人は繋がつて環をなし而も各自が対応して地球を分けもつという世界観が現れているのである。見知らぬ人に話しかけてもよいではないかと歌う *Crossing Brooklyn Ferry* はこの考えの表れでもある。

---

1. G. W. Allen, op. cit., p. 127—8.

2. *Ibid.*

第3版から俄然宗教とか民主主義という言葉が現れ出したがその前年あたりにあつたに違いない個人的な大悲劇の故とされている。大詩人は悲劇から生れると原則的に言われているが彼も例外ではなかつたらしい。この頃が最も創造的な時であつて、その代表的な作品に *Out of the Cradle Endlessly Rocking* がある。海のほとりで妻を失つた雄鳥の歎きと波の音の交錯に暗示を受けて、死と愛こそ凡ての歌の真のテーマであると悟る。*Children of Adam* 詩群の大部分はこの時の発表であつて最も性的な歌として屢々非難されている。それは異性間の恋愛の歌ではなく動物的な生理的な愛である。そこには生殖の汎神論的解釈が施されているのである。性も死と同様生の一過程であるとみているのであつて貶さるべきではないとする。エマソンの兩三度にわたる忠言にも拘らず修正することもなく、それが世人に嫌悪観を与えた重要な因子であると気づきつつも最後まで描写を変えず、而も歿後の削除をも禁じた程の執心振りは何の故か。それは性についての正当な考え方を持たない限り、彼の生成発展の理論は保たれず、生命のイメヂャリ<sup>1</sup>は破れ、「草の葉」は枯れ去ると惧れたからであろう。性の解放者としては正に D. H. Laurence の先駆者<sup>3</sup>である。

*Children of Adam* が amativeness (異性間の愛) を表すのに対し adhesiveness (同性間の愛又は僚友の愛) を表すものとして常に並び称せられるものに *Calamus* 詩群がある。この植物のイメヂャリ<sup>1</sup>に富む僚友愛の歌は彼が民主主義の基礎たらしめるために歌つた<sup>4</sup>と後に説明しているが、併し永い間専ら同性愛の歌であるとして非難されて来た。近くは1955年未の事件として、キヤムデンとフィラデルフィアを結ぶ新橋にホイットマン橋と命名しようとして、市当局がカトリックの団体から反対せられたと報ぜられている。その理由は男色奨励の危険ありというにある。これもホイットマンの愛の根本観念について理解のない所から来ている。

3. J. Middleton Murry: "Walt Whitman: the Prophet of Democracy," *Leaves of Grass One Hundred Years After*, ed. by Milton Hindus, p.126. Leslie A. Fiedler: "Images of Walt Whitman," *Ibid.*, p. 61.

4. Preface, 1876, (note).

第一期は前半は明朗であり後半には蔭がさしてはいるが、全般的に見て極めて個人的な主観的なそしてロマンティックな傾向の強い期間であつて、自我中心の世界観を展開している。自我拡大の方法として彼がとつたと見られる靈魂の旅のイメージも、それを手段と見ればマスク説或はポーズ説の非難ともなるが、それは末枝的な技巧ではなく、実体としての靈魂を信ずる彼にとつては全く自然な必然的な過程なのである。Fiedler が Whitman's trickery is essential, not accidental, to his poems,<sup>5</sup> と言つているのも技巧は技巧であるがそれが本質的な故に不誠実ではないと見ているのである。万象の間を飛翔しその凡てに没入する自己の靈魂のイメージがとる著しい行動性が第一期を特色づけている。なお仮面や擬体の故を以て彼を攻撃するのは彼の詩人たることを忘れていた者である。扮戯は芸術の世界のことである。

第二期即ち南北戦争に入ると自己のイメージの行動性が薄らぐ。これは冷厳な戦争体験が彼に客観的な態度をとらしめるに至つた為であろう。描写にもリアリスティックな面が急に増して来ている。戦争が「草の葉」の枢軸をなすと自ら言つているが、一つの大きな転機をなすことは確かである。戦友の死という現実を目前にして、死によつて僚友愛は拡大強化せられ、かくして完全一致の世界に到達することが出来ると民主主義精神の理解を深めるに至つた。従来<sup>6</sup>の観念的な理想が具体的な実践に高められて彼は次第に国民詩人たる相貌を呈して来た。

'65年に出た *Drum-Taps* は戦争の記録であるが戦線に駆りたてる感じのも<sup>6</sup>のは戦争初期 '61 年作の二三の作品のみである。看護手として静かに眺めた露営の情景や、浅瀬を渉る騎兵隊の如き一幅の絵画と見られるものがある。又大義に殉じて安らかに瞑目する戦友の描写がある。永い平和と繁栄に慣れたアメリカは今こそ苦悶の危機から学びとるべき秋であるとして、戦いの稲妻の中に自由の旗、星条旗を浮び上<sup>7</sup>がらせているが、激しい戦闘や凄惨な殺戮の場など

5. Leslie A. Fiedler, op. cit., p. 73.

6. *Beat! Beat! Drums!* 1861.

7. *Song of the Banner at Daybreak.*

は画かれていない。古来戦争と恋愛は詩歌の二大テーマであると言われているが、ホイットマンにあつては普通の意味ではこの両者とも存在しない。戦争礼讃や恋愛讃美もなく、戦争呪咀や失恋の詠歎もない。詩人としてよりも看護手としての行動、即ちカラムスの愛の実践に忙がしかつた時期であつて筆に表れた詩精神の躍動はない。戦争の死も冷厳な事実としての死であつて、戦前にあつた病的なロマンティックな死は歌われない。この死の現実に直面してから彼の神観に超越神的の面が急に増して来た。死の客観視から死を司るものへと根元的な考察が加わつた為であろう。*Chanting the Square Deific* に於ける如く、彼の従来<sup>8</sup>の既成宗教反抗の態度に幾分の軟化が感ぜられる。

戦争が詩形に及ぼした影響としては *Pioneers! O Pioneers!* や *O Captain, My Captain* に現れた進軍譜的リズムがある。又想の上では産業戦士を戦場の勇士にみたてて、平和復興に或は民主主義の確立に、新たな軍事行動を起さんと叫ぶなど、戦争のイメージが取り入れられ、後の作品にも度々用いられる。雷鳴や稲妻の例の増加も見られる。併し最も肝心な影響は戦争によつて彼の眼界が拡大され無限の展望を得たことである。平和回復と共に歌つた *To the Leaven'd Soil They Trod* の中で、戦争と平和の目撃者たる普遍の大地が彼を掻い抱くと言ひ、「私を産んだ北国の氷と雨は最後迄私を育成する、/ だが私の歌を完全に成就させるのは南部の灼熱の太陽である。」と歌つている。

比較的<sup>8</sup>に優れた詩が少ないと言われるこの時期に、「草の葉」全篇にわたり最大の傑作と目され、俗に *Lilac Elegy* とも称せられる *When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd* がある。それは切々たるリンカン哀悼の賦である。深く敬愛していたリンカンの死が、如何に彼を心底から歎かしたかが窺われる。幾多の戦争死を通して新たに身につけた冷静な客観的な死生観の上に、突如身近な個人的な死に当面して一層死についての省察を深めた。そこから死の讃歌が生まれている。この詩が「揺り籃の歌」と相似た海と小鳥のイメージに支えられているということは、双方共に或る身辺の事件に基づいて

8. *Adieu to a Soldier; Song of the Exposition*, §9.

おり従て彼の個人的な感動が深かつたことを物語る。印象が残るのは描写の迫真性によるが、それは結局根元の具体性に依存する。そして具体性は心理的のことであれ外界のことであれ、それが個人的なものほど強烈である。「揺り籠」には鳥の死<sup>9</sup>（それがホイットマンの親しき何人の死又は喪失を指すとしても）があり、「ライラック」にはリンカンの死がある。尤も後者は前者に比し遙かに規模も大きく、イメヂヤリィも複雑であるが、描写の態度はより平静である。

*Drum Taps* とリンカン追悼賦が合わされ、それに新作8篇を加えて第4版<sup>10</sup>が'67年に出来た。従来の詩の配列を整理し最初に *Inscriptions* の詩群をまとめた。現在巻頭を飾る *One's Self I Sing* もこの時現れたが、初版に於て先づ *I sing myself.* と私自身を歌いはじめていたのに引き比べ、如何にその態度が冷静となり、*self* を客観視しているかが点かれるであろう。従来の作にも改訂の筆を加えたものが多く、第3版当時の病的な自白も国家的悲劇の前には余りにも瑣末なりと見たか抹殺することに努めた。友愛は社会国家の紐帯であるとの信念を強めて、禍を転じて福となさんと希い、戦いは清澄のための醗酵であるとみて戦後の経営に乗出した感じである。現在は民主主義の産みの苦しみにあると考へ、南北将兵の小我の死が、やがて南北融和せるアメリカという大我の誕生をもたらすと見る。さればこそ彼は戦死者の顔にキリストの似顔を感じたりする。<sup>11</sup>

'71-'72年に第5版が出ているが、それには'68年に出された *Passage to India* が含まれている。この詩はスエズ運河の開鑿、北太平洋鉄道の開通、並に大西洋海底電線の敷設等によつて生じた、国際的な距離の近接感が、物的勝利のみならず精神的進化の約束をもたらすとみて友愛精神の拡大を讃えている。際物的の感じはあるが、自らは死と不滅を扱うと言つている。またインドへの航路は原始の叡智への帰航であるとして、魂の船旅のイメヂヤリィが従来

9. H. S. Canby, op. cit., p. 143. に物真似鳥についての事実とある。

10. 四種類あり、この版以後屢々一の edition に数種の issue がある。

11. *A Sight in Camp in the Daybreak Gray and Dim.*

の海のイメヂヤリィの上に加えられた。

彼が希つた南北の融和は政治的に解決し引続いて物質的の繁栄が訪れた。併しアメリカはホイットマンの理想とするデモクラシーからほど遠いものであつた。道義的國家の建設の要を痛感してこれを促進すべき民主主義文學の誕生を更に声を大にして叫ばなければならなかつた。それが彼の散文の代表作 *Democratic Vistas* (1871) である。又前述の如く 1872年の序文で、従来は民主的個人を歌つたが今後は民主的國民性を歌う。自分は民主主義の道づけだけをしているのだと言う。この頃の作として *Song of the Exposition* (1871) は勿論その物質的繁栄を謳歌しているに違ひはないが、真意は寧ろ新大陸に詩神を迎えんと叫んでいる所にあることが解る。

第二期はかくして主観から客観へ、ロマンティックからリアリスティックへの態度の変化があり、殊に死の考察は一段と深まり生理的な性のイメヂヤリィは影をひそめた。神観にもオーソドックスな神が屢々姿を現わすようになってゐる。尤も神は完全な友であると歌う如く汎神論的であることは變りがない。また南北の融合、道義的國家を希うというように観点も個人的から國家的へと推移がある。國家的と云つても狭い國粹主義ではない。一國家の纏まりなくして全世界の融和などは望み得ないとの考えを基としている。彼が余りに國家主義的であるとの一部の批判<sup>12</sup>に対し Milton Hindus も上と同じ見解に立つて弁護している。

第三期。1873年54才の時中風で倒れニューヨークを去り、弟のジョージを頼つてキヤムデンに移り住んだ。而もその年母の死に会つて意氣とみに衰えた。1876年に第6版が出ている。病中作 *Prayer of Columbus* の中で、尾羽うち枯らした敗殘の身として自己を晩年のコロムブスに譬えているが、その調子は極めて宗教的であつて、一般にこの後の作品は著しく宗教的哲學的冥想の深まりを感じさせる。暫く戦争の擾亂と戦後の發展の激しさのうちに、吾れを忘れていたかの觀があるホイットマンが、吾れと吾が身に立ち返り再び主観的理想

12. "The Centenary of Leaves of Grass," *Leaves of Grass One Hundred Years After*, ed. by Milton Hindus, pp. 19—20.

的な考え方に近よつて行く。*Song of the Redwood-Tree* は伐り倒される杉の木、そして地位を譲つて引揚げる森の女神に、病中の哀感がひそんでいるが、併しこの歌は病気の愚痴を言つていゝのではなく、永い準備によつて齎せられる理想の社会、西方の新天地を讃えているのである。そのことは *Song of the Universal* で地球の核心にひそんでいた種子が、過去の幾時代をも経て開花結実し、靈的な理想の社会が実現されると歌つていゝのと同様、ヘーゲルの善に向つて進む宇宙進化の考えを表している。その宗教的哲学的觀念の根本は *Eidolon* に表れている。詩人は万物の靈を歌うべしとし靈魂は眞の自己、自己の靈は自然の靈の一部であり、眞の實在は靈魂である趣が抽象的に歌われている。

第7版が'81—'82年に出た。新たなものとして極く短い詩が少数加えられただけであるが、凡ての詩の配列がこの版に於て決定的に整理されるに至つた。この後8,9版には順序の変更がない。新作の一に *Roaming in Thought* という二行の詩があつて、ヘーゲル読後と詞書がついていゝことが注意を惹く。内容は前述の宇宙進化の考えで、悪の消滅と善への向上が歌われているのである。

'82年に *Specimen Days* が出た。これは伝記、戦争記、日記その他のエッセイ風の雑録である。また '88年に *November Boughs* が出てその序 *A Backward Glance O'er Travel'd Road* で自分の歌は世にうけ容れられなかつたが未来に頼つたと述べ、自己の詩作の歷程を回顧していゝが、これは同時に思想の発達史とも見られる。最早詩精神は殆ど枯渴したが批判的精神は衰えず多くの断片的なノートを残していゝ。

第三期には大作として見るべきものはないが、老年期の高められた絶対的の立場から従来之作を見直していゝ所に意義がある。尤も全作品が臨終版 ('92年第9版) 当時の考えで一色に塗りつぶされていゝわけではない。成長の過程が外部から窺い知ることが出来る程度にその大本は留められていゝ。ただ詩集の整理が大体主題に従つていゝので、年輪を追うていゝない点が冒頭に述べたように読者に混乱を与える。今日広く読まれていゝ「草の葉」は、この第9版に、

ホイットマンの承認を得ておいた晩年の作 *Old Age Echoes* の群を加えて、197年に Traubel 等著作管理人の手によつて出された第10版、又はこれを原典とした諸種の普及版である。

第三期の宗教的哲学観を見るのに好適の詩は *A Persian Lesson* (91)<sup>1</sup>であらう。彼は白髪のスフィ教の老僧にかく語らせている。「要するに天帝は一切であり万有である——すべての生命と物象に内在している。/ 恐らく多くのものが所を変えているかもしれぬ——併し天帝はそこに在ます。/……それは凡ゆる原子に於ける核心的衝動 / (屢々、無意識な、邪悪な墮落せるもの) であり、/ いかにも遠くともその神聖な源泉と起因とへ帰つて行く。/ 主体と客体の中に、同様のものが一つの例外もなく潜在している。」ここに彼が「草の葉」を通じて運んで来た汎神論的輪廻転生の根本的な観念が露呈されている。

### Ⅲ 基本観念

ホイットマンは宇宙的詩人であると自認している。彼の思想は自然人事の一切をこめて善も悪もあるがままにとり入れ、一見矛盾に充ちているようであるが、それは単なる渾沌ではなく、雑然と見ゆるがままに一の統一的な法則に従っていることを意識している。即ち彼は天地自然の動きに見られる宇宙の秩序が、自己の思想にも妥当すると信じている。妥当と云わんよりは、星辰の運行も自己の思想の働きも、根元の理を一にしていると信じている。彼が自然と人類の融合を目指すと歌うのも、この信念があつてこそ言い得る言葉である。

然らばその統一原理を何に求めているか。現実の生活の窮極の原理に到らんとする働きが哲学であるとする、彼の思想も哲学に近いと言い得るわけである。彼には人間とは何か<sup>2</sup>、草とは何か<sup>3</sup>という存在論的問題の提起もあり、如何なるものも全体の部分である<sup>4</sup>と見るように、哲学的な考察がゆきわたっている。その故に彼は屢々哲学者と見られるが、その思索は神祕的であつて、組織

1. *When the Full-Grown Poet Came; Passage to India*, §5.

2. *Song of Myself*, §20.

3. *Ibid.*, §6.

4. *Ibid.*, §45.

的な理論の展開はない。「私は哲学と宗教を再吟味する<sup>5</sup>」と云うが、「何らの新理論や学説をうちたてるものではない<sup>6</sup>」と断つている。哲学理念の応用者ではあるが、体系的な哲学者でないことは自認している。併し自らも予言者<sup>7</sup>と称することは好んでおり、世人の教師たる役割を演じている<sup>8</sup>と自負している。この点は poet-prophet と呼ばれるのに値する。尤も哲学の基礎は愛である<sup>9</sup>と説くあたり哲学というよりも寧ろ倫理宗教に類する。彼は「一切の上にある靈魂、その為に星辰も回轉する<sup>10</sup>」、「靈魂なくして一切は何か<sup>11</sup>」等の句を吐いているので、窮極の存在者は靈魂であると考えていることが解る。併しその認識は、「靈魂の實在は生長が証明する<sup>12</sup>」と言うように理論的ではない。而も単なる認識に留まらず直観的に感性的にその窮極存在たる原理との合体へ導かんとしている点では正に宗教と云うべきかもしれない。事実彼は「私もまた一派の宗教を創める<sup>13</sup>」と言う。現象の中に絶対を見る立場に於ては哲学も宗教と変らぬ。勿論哲学は存在の合理的会得であり、宗教はその礼拝であるというので、一方は精神の自由に基き他方は権威への信仰に根ざしているが、一切の有限なるものに無限のものを見る立場に於ては両者は近似の目的をもつている。ホイットマンの考えは宗教とも哲学ともとられるのであるが、それは古来多くの敬虔なる哲学者の態度に見られるところと変りがない。

ホイットマンは窮極の存在者は靈魂であり、靈魂は生命の原理であると見ている。万物は靈魂によつて生じ、靈魂なくしては一切がない。併しそれは超越的存在ではなく万物に内在している。従て一と見れば世界靈魂であり、多と見れば個々の魂をもつ万有となる。彼の宇宙観によれば、世界万有は永遠無窮の

5. *Song of the Open Road*, §6.

6. *Myself and Mine*.

7. *Song of Myself*, §25; *Thou Mother with Thy Equal Brood*, §5.

8. *Song of the Exposition*, §7; *By Blue Ontario's Shore*, §12.

9. *The Base of All Metaphysics*.

10. *Song of the Universal*, §2.

11. *Grand is the Seen*.

12. *A Song of the Rolling Earth*, §3.

13. *Starting from Paumanok*, §7.

靈魂の分身を荷つて最高善に向つて進む<sup>14</sup>動的な有機的な段階をなしている。その最低段階は地球であり、最高は人体である。<sup>15</sup>これは神祕的な宇宙進化の理念である。<sup>16</sup>従て分身としての靈魂というも生物のみに限つて言うのではなく、<sup>17</sup>動物界にも靈魂を認め、地球の生命も考えられ、靈魂とはすべて存在するものの本質或は存在目的であると見る。彼にあつては自然界の牽引性は、互に分けもつ靈魂に基くとして、それを愛と名づけ、<sup>18</sup>異性間のは *amativeness*、同性間のは *adhesiveness* と称える。

ホイットマンの教説の真髓はこの窮極原理としての超時空的靈魂を大衆に悟らしめるにあると見る事が出来る。その靈魂は時間的に見れば靈魂不滅であり輪廻転生即ち縦の大連鎖が考えられ、従て死生一如であり永遠の生命という信仰が生れる。その靈魂を空間的に見れば万有靈魂説となり無尽縁起即ち横の大連鎖が考えられ、従て共感愛着となりデモクラシーの信念が生れる。時空に囚われぬ魂の自由と、横の連鎖に見られる平等と、共感愛着の友愛とを基としているデモクラシーが、永遠の榮をもたらすという確心は、それが不死の生命の根源たる同じ靈魂の働きに由来すると見るところにある。靈魂とデモクラシーの関係がかくの如く解されるので、「草の葉」全篇を若し要約すればこうも言えるであろう、「靈魂の自覚によつて平凡なるものにも意義を認め、それらの自覚によつて古い伝統を破り、自由平等の基礎の上に愛に結ばれた融和した社会を築こう。民主社会の基礎づけとして文芸の方面に於ても歐洲的旧文芸を脱却して、平凡にして現代的な日常茶飯事の中に美を見出し、アメリカ独自の文化を打建てよう。」

「草の葉」の中には靈魂 *soul* という語が極めて多く、名詞中では頻度最大である。その理由は *soul* を種々の意味に使用しているからであつて、普通の靈魂、個々の靈魂はもとより、個々のものもその属性たる叡智とか想像力とか

14. *A Song of the Rolling Earth*, §1; *Song of the Open Road*, §13.

15. *Song of Myself*, §31.

16. *Ibid.*, 44.

17. *Song of the Universal*, §2.

18. *I am He that Aches with Love*.

の如き意味の場合もあり、靈魂がものの本質たるところから自我 self と全く同意語に用いられる場合も甚だ多い。いま期別に用例を見ると次のような傾向が解る。

第一期は個人的な関心の時代であるために普遍的な靈魂、世界靈魂ということには殆ど触れない。I and my soul という表現が多い。靈魂の存在についても、「靈魂を見たいか<sup>19</sup>」、「叡智は靈魂のもの<sup>20</sup>」、「靈魂の实在は生長が証明する<sup>21</sup>」と個々の観点から見られる述べ方をし、その不滅性についても、「一切のものが例外なしに永遠の靈魂をもつ<sup>22</sup>」、「人間の魂は亡びぬ<sup>23</sup>」と歌っている。「魂の電流<sup>24</sup>」とか「魂の流出は幸福<sup>25</sup>」等というも、そうした個人的な見方による。

第二期になると「一つの主題靈魂のみ<sup>26</sup>」という考えが圧倒的であつて、the soul を客観的なテーマとした歌が多い。「靈魂の無垢なる直覚の働きを想う<sup>27</sup>」、「靈魂即自我<sup>28</sup>」という句も個人的な響はない。

第三期に入ると、前出の「一切の上にある靈魂」という句から世界靈魂を考えていると見られるが、同時に可見なものに対比して靈魂を讃え、「さらに進化的で宏大無辺、解きがたきもの、おお私の靈魂！ / さらに遙かに多種多様——彼らよりさらに永遠なる御身よ<sup>29</sup>」となると、my soul というも個人的なそれではなくして普遍的な the soul と合体し、主客統一の立場から見ていると解すべきであろう。

普遍の靈魂を神と見れば、個性化された靈魂は何れも神であつて、私も神、

19. *Starting from Paumanok*, §13.

20. *Song of the Open Road*, §6.

21. 註12.

22. *To Think of Time*, §9.

23. *Thought*.

24. *I Sing the Body Electric*, §1.

25. *Song of the Open Road*, §8.

26. *Quicksand Years*.

27. *Passage to India*, §7.

28. *Ibid.*, §8.

29. *Grand is the Seen*.

君も神、万象が悉く神と見られる。ホイットマンにはこの汎神論的見解を示す句が多い。「私は凡ゆる物象の中に神を聞きまた見る<sup>30</sup>」、「この驚くべき神こそ私である、/ 他の神々たる私の愛する男女の間にたち交るのは驚異である。<sup>31</sup>」と言う。

大体汎神論は一口に云えば、宇宙は神であるというにある。神は一切であり一者である。神を外にして何ものもない。神は絶対者であるが同時に一切は神である。即ち一即一切である。汎神論は極めて古い考えであつて、例えば印度のバラモンでも観念的ではあるが万物は全一者の現象であると見る。梵即ち一者から一切のものが出現し流出すると見る。梵は凡ゆる雑多性を超越した純粹絶対であり、これと合一することが祝福された状態とされる。ギリシヤに於てもゼノファネス<sup>32</sup>が最初に汎神論を唱えたと伝えられている。彼は原初の統一をなすものとして万物を生滅せしめる全一者を考え、これを神と名づけ、世界万象それが神であるとした。世界靈魂を信ずるプラトンの学従も、ロゴスを奉ずるストア哲学の流れも、新プラトン哲学も汎神論的であつたと言ひ得る。キリスト教に於ても神の超越性と内在性とを同時に強調したクザーヌス<sup>33</sup>が先づ汎神論者として名を知られている。

併し近代汎神論の提唱者としてはスピノーザが挙げられている。彼によれば神に対して世界は幻妄であるとして、神の外は如何なる実体もないと見る一種の無宇宙論である。神は一切のものを自己の中に把握しているが故に、外部的のもしくは超越的原因ではなく内在的原因である。その存在の否定によつて万物の否定される形而上学的原理は同時に宗教的実在の神である。自然の存在は神の証左であるとした。この考えはライプニッツ以降ヘーゲルに至る迄に修正を経ているが、独乙理想主義哲学の背景をなすものであつて、ホイットマンが晩年強く共感しているところである。

このような無宇宙論的汎神論に対し、近代の自然科学に立脚し、エネルギー

30. *Song of Myself*, § 48.

31. *Song at Sunset*.

32. Xenophanes, (BC. 6th c.).

33. Nicolaus Cusanus, 独乙哲学者 (1401—64).

と物質とを属性とする根源体を実体として、全世界を統一的に見る世界観がある。神は宇宙の中に還没されており、自然の総和と見られる。一種の汎宇宙論的汎神論であつて、ヘツケル<sup>34</sup>がその代表者と考えられている。

汎神論は上のように二大別され、勿論その中間に幾多の段階はあるが、何れも自然を神もしくは、より高き不可見の一者のシムボルと見ることには変りがなく、この点に於て汎神論には多分に神祕的要素が含まれている。

ホイットマンの汎神論も初版当時は肉体即靈魂という表現が必要以上に生理的に解されて、唯物論的汎神論とも見えるが決してそうではなく、女は肉体の門<sup>35</sup>というのも肉体は靈魂の個性化する場なるが故に尊く、その場を与える女子は従て頌めらるべしと言つていたのである。併しそのような肉体尊重論からも見られる通り、初めの間は汎宇宙論的即ち多の強調が目立ち、次第に無宇宙論的即ち一の強調に移つて行く傾向があつた。尤もヘツケルは彼よりも後輩であり、彼が模倣したとは考えられない。Allen はホイットマンの汎神論をブルーノー<sup>36</sup>の汎神論に似ている一種の汎心霊主義であるという<sup>37</sup>。上の推移を考えなければ概説的には妥当である。ブルーノーは世界に内在する神より外の如何なる神をも認めぬ。彼は質料と形相の統一を教えて形相は質料の内部的生命であるとする。ここまではアリストテレスから一步も出ていないが、彼は更に『同一質料が万物を拡充する。初めの種子が穂、パン、人間、死、地、石となる』と説く。これは確にホイットマンの悦ぶところである。何故かと云えば彼の魂の旅のイメヂヤリーをこの質料拡充説に荷わせればよいのであるから。彼にも目ざまされて旅に出ることを待つ種子<sup>38</sup> seed や萌芽<sup>39</sup> germ を魂と見たてる場合がある。但し彼がブルーノーを知つていたかどうかは明かでない。

期別に表れた句から彼の神観の推移を見ることが出来る。即ち第一期には前

34. Ernst Haeckel, 独乙唯物論的自然哲学者 (1834—1919).

35. *I Sing the Body Electric*, §5.

36. Giordano Bruno, 伊太利哲学者 (1548?—1600).

37. G. W. Allen, op. cit., p. 256.

38. *Song of the Universal*, §1.

39. *To Thee Old Cause*.

出の「私は凡ゆる物象の中に神を聞きまた見る」、「他の神々たる私の愛する男女」という句や、「大工の中に神性に等しいもの、私の手の甲の一本の毛もいかなる啓示にも劣らぬ<sup>40</sup>」というところから、神を内在的に考えていることが知られる。

第二期には「神の領域に到らんと昇りゆく私と私の<sup>41</sup>靈魂」、「神を囲み長兄と弟<sup>42</sup>」、「宇宙人から宇宙神に捧げる<sup>43</sup>頌歌」などの表現から、神を超越的に見る態度の強まつたことが判る。

第三期には「数知れぬ救世主は御身の中に伏在する」、「天帝は万有、すべての生命と物象の中に<sup>45</sup>内在する」などの言葉から察すれば、再び内在面を強めてはいるが超越面をも無視していない。

要するに彼の神観は内在的で超越的であるが、その動きが多から一、更に多と一の統一へと動いている。いづれにしても彼は終始神への信仰は絶やさぬが、その神は教会に囚われた神ではない。民主主義の核心には宗教的要素があると説いてもそれは既成宗教の謂ではない。彼は「子供心にも神は自然力と闘うものだと説いた牧師の説教に驚いたものだ。<sup>47</sup>」と歌い、また「人間を信じない人々の教えに従つてゆくのを見るのは<sup>48</sup>気の毒」であると、牧師や僧侶への不信を示している。併しキリストについては「あなたの名を唱える多くの人、あなたを理解しないとしても気にかけて下ない。 / 私はあなたの名を口にしないけれどもあなたを理解しています。<sup>49</sup>」と歌つて神の真意を悟っている旨を表明している。宗派で云うならば母や父の影響によつてクエーカーに最も親近感を抱いており、何ものよりも inner light を尊しとする態度は、生涯渝ら

40. *Song of Myself*, §41.

41. *Passage to India*, §8.

42. *Ibib*.

43. *The Mystic Trumpeter*, §8.

44. *Thou Mother with Thy Equal Brood*, §5.

45. *A Persian Lesson*.

46. *Democratic Vistas*.

47. *A Child's Amaze*.

48. *Thought*.

49. *To Him That was Crucified*.

ない。

#### IV 先哲との関係

ホイットマンは「草の葉」が内容に於ても形式に於ても独自のものであることを標榜している。そのために月並のテーマや形容語句を斥け、先人からの引例も極力避けた。目に触れ耳に聞こえ想に浮ぶ一切のものをとり入れてカタログ的に羅列した彼の詩句の中に、古人の言葉が入つていたとしても不思議はない筈であるが、これは明かに抑制したものである。

年少の時から聖典、シェークスピア、ダンテ、古代印度の詩などには親んでおり、殊にスコットの詩集を愛読した<sup>1</sup>。然るに彼の詩作品の中にそれらの名が引例の典拠としては掲げられていない。偉大さは認めているが、それらは旧時代封建世界のものであつて今日の囚われざる自由詩の範にはならぬというのである。彼はそれらよりも寧ろ海のリズムに従うと言う<sup>2</sup>。そして昔の大詩人らに圧倒されずに済んだのは、海辺などの大自然を前にして読書をした習慣のお蔭であると明言している<sup>3</sup>。即ち彼は先人の思想を、もつて自己の詩囊を肥やす糧とした。それは恰も靈魂の脱け出でた肉体は、肥料となつて地を肥やし美しいバラに咲き出ると彼自分が歌つているが如くである。肥料は地表に出る要がないように、彼が咀嚼した先人の名は一々掲げられないのである。併し第二期も後半頃から、丁度神観がオーソドックスの気味を帯び始める頃から、この地中の肥料となつた先人たちの靈も、一躍かかげられて天に輝く星座の列に加えられるようになった<sup>4</sup>。散文には古今の偉人が屢々頭を出す。殊に「回顧録」にはミルトンの有名な野心的な言葉として、『人類に神の道の正しきを証せん。』という句を引合いに出し、テヌの独創的な芸術の弁を論じ、ヘルデルが若きゲーテに教えた『偉大な詩は常に国民精神の結果である。』などの句も見える。併し

1. *A Backward Glance.*
2. *Had I the Choice.*
3. *A Backward Glance.*
4. *Song of Myself, §49.*
5. *Democratic Vistas.*

「草の葉」の中ではそれほどの変化がなく、僅かに過去の大詩人や哲学者が偉大な魂の例として時折名を挙げられている程度である。

そうした中であつてヘーゲルだけが、「ヘーゲル読後感」という詞書を添えられた一篇の詩 *Roaming in Thought*, (1881) を得ている。晩年のことではあるが彼は確かにヘーゲルに傾倒している。併しもとより模倣したものではない。「草の葉」の初期の作品から現れているその全くヘーゲル的な思想はたまたま一致していたと見るべきである。ホイットマンは己れの見解の類似性をヘーゲルに見出し、大いに自信を強めて彼を礼讃しているのである。恐らく自己の直感的觀念とその非系統的な思想に、組織的な理論づけを与えられたものとして欣んだことであろう。

ヘーゲルこそ近代最高の叡智であるとしてホイットマンは大要次の如く言う<sup>6</sup>。『人間精神を支配する最も深刻なテーマ——その解決に科学も芸術も其他人間の知的幸福も含めて一切のことが終局的に懸つている問題は、自我と非我との関係である。根元的にして而もデモクラティックな自我と、時空的客観的な宇宙及びその諸法則たる非我との関係である。イマヌエル・カントは人間悟性の問題には説明を与えたがこの問題は未解決のままに残した。シェリングは、同一の知性や感情や善悪の基準が人間には自覺的に、外界の自然には無自覺的に存在するのであつて、両者はその二元性と乖離性にも拘らず相互に転換可能であり従つ本質に於ては一者であるとする。併し G. F. ヘーゲルのその事柄に関する解釈は最善のものであろう。彼は実質的には上に概括した構想を採り入れて更に敷衍し強化し一切をそこに没入せしめ、それまでの説の不備を補填した。その為はその構想は初めて首尾一貫せる形而上学的体系となり、前記の問題に対する実質的な回答となつている。この体系はもとより将来の頭脳がそれを改訂しまた再建することさえあるであろうとは明かに認めるものであるが、兎に角今日に於てはその完全性に於て光芒を放ち、宇宙の思想を光被し、未だ曾てない慰安と科学的保証を以て宇宙の神祕について人心に満足を与え

6. "Carlyle From American Points of View," *Specimen Days*.

る。」

更に彼は語を継いでヘーゲルの宇宙観を伝えている。『全世界は過去現在未来を問わず、また物質と精神、自然と人事のすべての対比をもこめて、創造的思惟の無限なる過程に於いての異なる発展の階梯或は鎖環である。諸現象の矛盾撞着と見ゆるものは、中心の鞏固な統一原理である永遠の目的によつて結ばれている。そしてその目的とは恰も百川海に注ぐが如く、一切のものが着実に善に向つて進んでいることである。』この考えが如何にホイトマン自身の抱懐せる宇宙観と一致しているかが解るであろう。

ホイトマンがヘーゲルを最も高く評価しているのは、その神学を科学的に解説したことにある。(Theology, Hegel translates into science.) と述べてこの理解は J. Gostwick's abstract に負う所大なりと明記している。<sup>7</sup>ヘーゲルが時代や民族の異なるに従つて起る宗教の相違や神理念の矛盾は、本元の一の解釈の発展段階を示すと見ているその見方に賛している。そしてそのようにヘーゲルを解しているのは正しいと思われる。また修練せる智恵と天性の直観とを併せもつて、万象に表れる創造的意図の倫理的統一性と健全性を確信する思索家こそ、まことの信心家であり哲学者である。天意の働きを悲観的に見る人は口に敬虔さを表しても不信心者で無神論者であると、ヘーゲルの意を忖度している。そしてヘーゲルを讃えるのはカーライルが常に抱く悲観主義と世界墮落の考えを埋め合せるばかりでなく、自分の知る限りではアメリカ的なものの考え方をヘーゲルが表していると思うからである。ヘーゲルの所説こそ時間空間の創造的領域に於て、新世界のデモクラシーをよしとする本質的な最高の理由づけである。それはアメリカの広さと多様性と活力とがあつて始めて理解されまた実証される。かかる考えが独乙否旧世界に生れたことは不思議である。カーライルこそまさに期待され得るヨーロッパ的産物である。』と語っている。尤もカーライルが当代イギリスの最高の知性たることは認めているのである。

---

7. *Ibid.*, note.

ヘーゲル礼讃は上のように徹底的で少くとも精神現象或は宗教に関する所説はすべてホイットマンの首肯し得る所であつたと想像される。ヘーゲルは宇宙は自然人事を通じて根本實在たる絶対精神の論理的弁証法的発展であるとする。<sup>8</sup>この立場から彼は真理は一にもあらず多にもあらずその統一である一具体的のものは一と多を自己の中に含み、その一多は運動により統一されている一従て真の實在は動的のものであると見る。彼は自然の目的は有機体の発見にありとして、先づ自然は機械性、化学性、有機性の三段階に発展するものとし各段階は下位の段階に萌芽的に含まれていると見る。従て有機性は機械性の中にもある。そして有機性の最低段階は地球であり、人体は自然の最高傑作である。地球は動物の粗笨なる綱要であり、地球の生命とか天体の霊という考えも不思議でなくなる。そして一切の物質を支配する集中化的傾向として牽引性を認める。この三段階を精神の説明にも用い、精神は個人的（主観）、社会的（客観）、及び絶対的（神的）の三段階に発展する。芸術宗教哲学は主観と客観の統一である絶対精神の自由に達することを目的としている。殊に彼にあつては宗教と哲学とは一に帰する。即ち彼は言う、『神の認識は同時にまた神的意志の充満である礼拝である。真の神の認識よりも深刻なる両者の結合はない』<sup>9</sup>と。これがホイットマンの最も我が意を得たりとした点であろう。

先に述べた Gostwick (英人) の翻訳は1882年のものであり、ホイットマンがそれを読んだと記した随筆も全年の作である。然るにヘーゲル読後感の詩は<sup>10</sup> '81年である。また'71年作の詩にもカント、ヘーゲル等の名が出ているのみならず、全年の散文「民主主義展望」には Hegelian formula の語さえ現れている。Gostwick 訳以前にヘーゲルに親しんでいたことは明らかである。恐らくカーライルやコルリッヂの作品を通じてであろう。ホイットマンとヘーゲルの関係の密接なことは早くから批評家の注目を惹いている。中にはホイットマン

8. ヘーゲルについては主としてクーン・フィシエル著、田村実訳「ヘーゲル精神哲学概要—上・下—」；矢崎美盛著「ヘーゲル精神現象論」；高橋里美・武市健夫著「ヘーゲル哲学概論」；岩波哲学辞典等を参照した。

9. 前掲「ヘーゲル精神哲学概要」下巻 153, 165頁。

10. *The Base of All Metaphysics.*

のヘーゲル知識の不足を非難している者<sup>11</sup>もあるようである。併しそれは「草の葉」の価値を些かも減ずるものではない。専門の哲学者でないホイットマンがヘーゲル哲学の全域について深い理解がなかつたとしても怪しむに足らぬ。その点は Canby の如く『ホイットマンのヘーゲル哲学の理解はにわか勉強の域を脱しないが、彼は必要なものを取り入れて、依然としてオリジナルであつた。』<sup>12</sup>と評する態度に賛したい。ヘーゲルは少くも当時としては最近代の代表的な哲学者であつて、ホイットマンが晩年大いに共鳴したのであるが、あくまでも共鳴であつて模倣ではない。類似の故を以て難ずるわけにはいかない。ホイットマンの根本観念の類似は若し求むればヘーゲルより先にアリストテレスに見出されるのである。

アリストテレスは凡ゆる存在者の規定として形相、質料、運動の原理、目的若くは善の原理を唱えている。万有は質料と形相を以て成立せる一大階級組織であつて、純粹形相たる最高円満者又は神に向つての運動、即ち世界万有はエンテレカシアの段階の領域である。神はかかる運動体系としての宇宙の聯関に於て見られるものであつて、それは第一に動かすものであり、質料なき純粹形相、可能性なき純粹現実性である。アリストテレスにあつては靈魂は生命の原理である。生命を栄養的（植物的）、感覺的（動物の）、思惟的（人間の）の三段階に分けるが、これに応じて靈魂の三種の段階を認めている。更に彼は靈魂は目的活動の原理であるが故に、肉体はその具有する目的活動たる靈魂のために現在するという。従て靈魂と肉体の関係は形相と質料の関係に当る。ここまで見れば靈魂は生物の世界の問題で終るようであるが、彼が得意の説明と伝えられる『斧の靈魂は切ることにあり』という句を見れば、そこには比喩以上の意味があると思われる。

ヘーゲルは『アリストテレスは偉大である。靈魂を抽象体と見てはならない。』<sup>13</sup>と云つてゐるが、それは生命の三段階の解釈をヘーゲル流の精神の三段

11. Miss Parsons の説 (G. W. Allen, op. cit., p. 456.)

12. H. S. Canby, op. cit., p. 67.

13. 「ヘーゲル精神哲学概要」下巻. 322頁。

階に解釈し、斧の靈魂も実体的と見る所から来ている。これは即ち万象に内在する精神を認めることである。そしてアリストテレス以後のギリシヤ、ローマの哲学の傾向が抽象的個人を対象としその安心立命に関わつていゝることに対し、アリストテレスの靈魂の実体的解釈を崇めているのである。ヘーゲルの弁証法も根元的にはアリストテレスの運動の原理に依存しているのであろう。アリストテレスは凡ての物が運動すると考え、運動は相反する状態の間を往来することとした。可能性から現実性への過程である。結果された現実は新たな可能性を生む。この運動なくしてはエンテレカシアの上昇はあり得ない。アリストテレスの基盤が若し無かつたならば、ヘーゲルの頭脳も別個の価値を生じていた筈である。

このアリストテレスとヘーゲルの靈魂を中心とする思想上の一致は、そのままにホイットマンの思想に連つている点が多いことに気付く。ただホイットマンの場合は思弁的ではなく感性的直観的である点に差がある。またアリストテレスの名が一度もホイットマンの筆に登らないのは不思議な感じである。ホイットマンのオリチンについては幾多の説があり夫々何らかの一致点を先人の中に見出している。併し一致だけから見れば古来の多くの哲学者に彼との一致点を見出すことが出来る。

先づホイットマンは本質的に極めて倫理的であるが、その点はソクラテスの考えが真なるものを善の姿に於て意識しているために、道徳哲学であり善の宗教と言われるのに類する。ソクラテスは思惟たる理性は実体的であると共に主観的であるとしているが、これはホイットマンの靈魂の説明に役立つ。プラトンに於ても善は神性の第一要因である。造物主は善の理想に従つて感性的世界を最善のものに造り上げんとしている。尤も造物主といつてもプラトンにあつては窮極原因は実体界の諸イデアであるから神というのは最高のイデアであるという謂である。所でイデアは思惟の内に即ち魂にありとするところから、実体界の諸イデアの觀念はやがて世界靈魂を形成し、世界靈魂は万有の内に拡充し生氣づけると見るので、ここにイデアと物質即ち一者と多者の結合が二元論的色彩を帯びて成立する。かくて万有は生命の凡ゆる種類及び段階即ち可死的

並に不滅的存在の両者を自らの内に把握している。人間はこの両者から成つて  
いる。これはホイットマンの第一期に於ける肉体の強調が二元論的にも解せら  
れる立場にあるのと相似ている。尤もプラントンのイデアは実体界のものであ  
るとしてもそれは思惟の光の中に考察されたものであるから、ホイットマンが  
靈魂を以て地上的な現実世界にあるものとして、感性的にも把握している点に  
於て両者の隔りが感ぜられる。

汎神論の箇所に於ても触れたのであるが、スピノーザの哲学と宗教とが窮極  
に於て同一である立場、その神祕的汎神論的立場はホイットマンのものであ  
る。尤もスピノーザでは窮極の實在は「原因自体」であつて、ここから物の現  
象も心の現象も出て来る。そして宇宙には動因のみあつて目的原因はない。凡  
ゆる実体の全一性を神と見て、神は一切のものを自らの中に把握し、外部的若  
くは超越的原因ではなく内在的原因である。従つて神は一切中の一切である  
から何ものをも産出しない。凡ゆる自己性は不可能となる。一切は永遠の相の  
下に実体の必然的法則の下に機械的に存在し、世界は在るより他にあり得な  
い。これは機械的決定論である。「在るより他にあり得ない」との考えはホ  
イットマンにもあるが、彼は宿命的に、諦觀的にそう述べているのではなく、  
現段階を發展の必然的経過として見ているのである。それは可能性をほらむと  
見る樂觀的なものである。

ライプニッツは實在の本体を多元的に見て各相互に独立した自由な活動と見  
た。その勢力單位の無限なる数多性の単元モナドの現状態は、その凡ての開展  
する段階を表現する如く、モナドは又宇宙全体をも表現する。一は他を悉く表  
象する故に各モナドは宇宙の鏡である。この一分子が宇宙の鏡であるとの考え  
はホイットマンに於ても同一であるが、ライプニッツでは各単子間に相互作用  
がなく窓なしであるとしているのに対し、ホイットマンは相互の牽引作用を強  
調して友愛論の基礎としている。尤もライプニッツは一と多を共に本源的に見  
て「多の統一」を世界の本質とすることによつて一多の關係を解釈しようとし  
たが、その苦心の結果生まれた考えは神によつて予定された調和があるとし

た。即ち原モナドとして神を持ち来り各モナドの自律は神に依存する自律であるとした。こうしてその多元論は矛盾を衝かれるに至つた。ライプニッツが後に実在は単なる存在や原因ではなく生きた力であるとして自然現象はつまり宇宙の意思表示の方便である。万有はみな心をもち、その心は大宇宙意識の分身であるとして内在的目的観を明かにしているが、この点はホイットマンの靈魂とその分身の考えに全く同じである。

ホイットマンはカントの偉大なることは認めているが、いわばその余りに純粹に理性的なることを批判している。神の定在に関する論証に於てカントが『認識能力は有限である』<sup>15</sup>『我々は現象を認識するのみである。神は認識され得ない。ただ信仰され得るのみである。』<sup>16</sup>として否定的態度をとつているのに飽き足りない。そしてヘーゲルが同じ問題を宗教的知識の発展形式と考え、宗教は人間意識の神への推移であるとして宗教に科学的裏付をしている点を称揚する。併し『一とか多とかいうのは我々の見方の相違に過ぎない。』とのカントの冷やかな表現も勿論思弁的な問題ではあるが、これは宗教的に神と世界の問題と表裏一体をなす点に於て、ホイットマンの靈魂と物象の解釈を助ける。

ヘーゲルが当面の論敵としたシエリングも、その同一性の原理に於てホイットマンに与えた影響に一役買つているように見えるが、これも意識されざる一致と見るべきであろう。

ホイットマンには、多分に東洋思想が入つているように見える。*A Broadway Pageant* で日本使節の行列を見て人類発祥の地東洋来ると叫び、*Passage to India* で人類原始の叡智に還る等の句を吐くところからも察せられるが、アジア、東洋をば畏敬の念を以て眺める場合が多い。バラモンの思索の中軸をなす梵我一如、即ち宇宙の最高原理たる *Brahman* (梵) と個人を中心たる *Ātman* (我) とが同一無別であるとする考えは、やがて小我の死は大我の生長と見る印度哲学一般の根本死生観へと導かれる。ホイットマンへはエマソンや独乙哲学を通じて来ているのであろうが、その死生一如の思想の遠因をここに

15. 前掲「ヘーゲル精神現象論」45頁。

16. 「ヘーゲル精神哲学概要」下巻 423頁。

見出すことが出来る。また仏教殊に華嚴宗の教義にも酷似せる部分が見出される。その教義によれば宇宙の本体を一心（理体）となし、これを統一、自存、自由の根本的活力と見做し、活力の働きそれ自身が宇宙の本体を現し、またその働きの結果万般の現象となつて皆それぞれ宇宙の本体を表すものとなす。即ち一心の生起活動が宇宙であつて法界（宇宙）は一の縁起（関係）であるとする。これは水波不二の関係に見られる現象即實在論であつて一切即一、一即一切の教説をなしている。そこでは現象と本体とが相即無碍なるが故に現象差別の万有各個も従つて相即無碍なりと説く。個々の事物の中に宇宙の相互無尽なる縁起を表現すると見るのである。この本体の一心はホイットマンでは靈魂であつて、個々のものを宇宙の鏡とし、各個間の相互関係を説いているのは、この無尽縁起の理を自ら悟つていたものと見られる。

このように先哲との間に幾多の類似は見出されるのであるが、遠いギリシヤ哲学や東洋思想が直接の関心事ではなく、少くも晩年には近代独乙理想主義哲学に最も親近感をもつていたに違いない。彼は『私は独乙哲学の詩的代表である』<sup>17</sup>とさえ言つたことがある。併し初期に於てはエマソンの超絶主義的思想の影響が断然強かつたことは、若い時にエマソン熱にとりつかれて紙上で「師」と呼んだことがあると認めている点からも知られる。事実エマソンの楽天主義民主主義の弁護、個人への信頼感、独立自尊の強調、教会制度よりも個人の内観を重視する宗教観等そのままにホイットマンについても言われることであり殊にアメリカ独自の文化を持つてと提唱するエマソンの「アメリカ学者」の雄叫びは、ホイットマンによつて実践されたと見られるので、この両者の関係の密接なことは当然である。併しそれと同時にエマソンが『模倣は自殺である』<sup>19</sup>と教えた人であることに注意すべきであろう。

要するにホイットマンは多くの書と多くの詩人に負うているのであつて、單純にオリヂンを云々することは出来ない。そのことは Allen の広汎なる調査

17. C. J. Furness : *Walt Whitman's Workshop*, p. 236, Note 138.

18. "Emerson's Books (The Shadows of Them)," *Notes Left Over*.

19. *Self-Reliance*.

研究を以てしても結論は遂に『彼のルートは辿られぬ<sup>20</sup>』と断言し『彼は評伝家にとつて最大の謎である<sup>21</sup>』と述べていることから解るであろう。ホイットマンの偉大さは一二の根源にルートづけ辿ろうとするのが無理である。強いて言えば彼の生活した時と所の環境、それに自然の黙示、これらが彼への最大の教師と言ひ得よう。膨脹するアメリカの表玄関として人事の煮え沸るニューヨークを勤務地にもち、退いて一人想を凝らす故郷の自然を手近かにもつた彼、この両者の間を行きつ戻りつした冷熱の反復が、彼の思想を鍛えあげるのに大いに役立つたであろう。

今日極言する人は『ホイットマンは忘れられている。T. S. エリオットが出てから自由詩は一夜にして過去のものとなつた。』<sup>22</sup>と言ひ、又『彼は最も高く評価されているが、アメリカ詩人達に追従されないのは不思議である。』<sup>23</sup>とも言われている。英、仏、独、露等に於て一時占めたような異常な人気の衰えたことも事実である。併し「草の葉」は根元的な靈魂の働きから必然的に生れるべき個人の自由と人の和を基盤として、人類進歩の理想を説いている。その理想の社会は民主主義の世界である。自ら善意を与える書<sup>24</sup>と称しているが、エマソンも最初の手紙で「草の葉」は *fortifying and encouraging* な美点をもつと称揚した。仮令、詩形そのものの模倣者の数に消長があろうとも、如上の善意に感応するものは決して跡を絶たないと思う。民主主義が地上の夢である限り、ホイットマンの名はいつまでも唱え続けられるであろう。

20. G. W. Allen, op. cit., p. 455.

21. G. W. Allen: *The Solitary Singer* (Preface).

22. W. C. Williams: "An Essey on *Leaves of Grass*," *Leaves of Grass One Hundred Years After*, ed. by Milton Hindus, pp. 24, 29. 但しホイットマンと T. S. エリオットの関係についてはこれと全く逆の見解もある(アメリカーナ、第2巻第9号 120頁参照) Williams の説は古典主義復活礼讃の辞である。

23. G. W. Allen: *Walt Whitman Handbook*, p. 537.

24. *A Backward Glance*.